医療系研究科論文博士用

学 位 論 文 要 旨

氏 名　　和田　拓也　　印

論 文 題 目

「Safety and efficacy of chemoradiotherapy after endoscopic resection in patients with superficial esophageal squamous cell carcinoma

（表在型食道扁平上皮癌に対する内視鏡的切除後の化学放射線療法の安全性と有効性）」

指 導 教 授 承 認 印
草野　央　　印

「Safety and efficacy of chemoradiotherapy after endoscopic resection in patients with superficial esophageal squamous cell carcinoma（表在型食道扁平上皮癌に対する内視鏡的切除後の化学放射線療法の安全性と有効性）」

氏　名　　和田　拓也

（以下要旨本文）

目的：食道表在癌に対する内視鏡的切除後に、切除標本の病理学的検索にてリンパ節転移リスクが高い粘膜下層浸潤や脈管侵襲を伴う病変に対しては、根治を目指した外科手術が標準治療とされている。一方、侵襲を伴う外科切除に代えて化学放射線療法も行われるようになっている。今回われわれは、内視鏡的切除後に粘膜下層浸潤または脈管侵襲が認められた患者における、追加化学放射線療法の有用性を評価した。

方法：2000年1月から2015年7月までに当院で内視鏡的切除を受けた食道表在癌患者364例（425病変）のうち、病理組織学的に粘膜下層浸潤または脈管侵襲を伴う扁平上皮癌と診断された患者は93例（93病変）であった。この93例のうち、追加化学放射線療法を受けた41例（CRT群）、無治療経過観察された52例（経過観察群）を対象として、CRT群、経過観察群における長期予後の比較を行った。

結果：年齢中央値はCRT群で68歳（範囲、53-79）、経過観察群で72歳

（範囲、59-89）であった（p = 0.01）。5年後の全生存率はCRT群で87.5％、経過観察群で67.4％であった（p = 0.03）。5年後の無再発生存率はCRT群で80.8％、追跡群で64.6％であった（p = 0.056）。

結論：表在型食道扁平上皮癌に対する内視鏡的切除後の追加化学放射線療法は、効果的な臓器温存戦略となる可能性がある。